

場面緘黙傾向のある慢性疾患の生徒に対する指導・支援の工夫について
～生徒が自主的に意思表示や自己表現を行えるようになるために～

1 学校概要

(1) 学校沿革

本校は平成28年4月1日、企救特別支援学校（病弱教育部門）と北九州特別支援学校（肢体不自由教育部門）を再編、統合して、総合特別支援学校として開校した学校である。肢体不自由と病弱（慢性疾患など）に対応する教育を行う総合特別支援学校であり、小学部、中学部、高等部に加えて、訪問教育部が設置されている。北九州総合療育センターが隣接しており、センターの病棟に入所をしている肢体不自由及び重症心身障がい等を有する小学部、中学部、高等部の児童・生徒が通学している。

(2) 本校の病弱中学部について

本校の小学部や他の特別支援学校、小学校の特別支援学級から新転入してきた生徒が在籍している。本年度病弱教育部門中学部の在籍生徒数は6月現在、1年生男子3名女子1名、2年生男子4名女子1名、3年生男子1名の10名である。

近年、本校の病弱教育部門には、従来の慢性疾患の児童生徒に加え、心身症や発達障害を併せ有する児童生徒も増加し、一人一人の実態に応じた心身症等への対応が求められている。また、児童生徒の実態や教育的ニーズに応じて、Ⅰ課程（準ずる教育コース）、Ⅱ課程（下学年代替コース）、Ⅲ課程（知的代替コース）の学習指導を行っているが、一人一人の障害や特性が異なるため、より実態把握を丁寧に行うことも求められる。

ア 疾病・障害

・無汗性外胚葉形成不全	・三尖弁閉鎖	・ADHD	・てんかん
・ラーセン症候群	・難治性てんかん	・低血糖症	
・両側混合難聴	・知的障害	・自閉症	
・脊椎側弯症	・筋ジストロフィー	・心身症	

イ 教育課程について

教育課程	男子	女子
Ⅰ課程（準ずる）	2名	0名
Ⅱ課程（下学年代替）	5名	1名
Ⅲ課程（知的代替）	2名	0名

ウ 中学部の教育目標

- 思春期の心身の成長と変化に対応し、健康な身体と心を育成する。
- 自立と社会参加を目指して、小学校または特別支援学校小学部で培った力を学習や生活の場でさらに高め、社会性の向上を図る。

- 基礎学力向上を図り、自分の進路について考えることができるようにする。
- 働くことや役割を果たすことに興味をもち、いろいろな活動を仲間と一緒に協力して行い、楽しむことができるようにする。

エ 中学部の目指す生徒像（育てたい7つの力）

- 自分で健康に気を付け、元気に過ごす生徒（健康を保持する力）
- 自分のことは自分でする生徒（身辺自立の力）
- 人や物とのかかわりを楽しみ、進んで学ぶ生徒（認知・表現・基礎学力）
- 仲間と楽しく過ごし、協力して互いを支え合おうとする生徒（集団参加の力）
- 自分でしっかり考え、自分で決め、行動する生徒（自己選択の力）
- 自分からあいさつをし、自分の気持ちを適切に表現する生徒（コミュニケーション力）

2 主題設定の理由

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）の自立活動区分の内容「心理的な安定」項目（2）状況の理解と変化への対応に関することには、選択性緘黙のある幼児児童生徒の場合、特定の場所や状況において緊張が高まるなどにより、家庭などではほとんど支障なく会話ができるものの、特定の場所や状況では会話ができないことがある。¹⁾また、「コミュニケーション」項目（5）状況に応じたコミュニケーションに関することには、家庭などの生活の場では普通の会話ができるものの、学校の友達とは話すことができないなどの選択性緘黙の幼児児童生徒の場合、まず、気持ちが安定し、安心できる状況作りや信頼できる人間関係作りが重要である¹⁾と記述されている。そこで、心理的な安定やコミュニケーションに関する指導を「人間関係の形成」と関連付けて指導を行い、具体的な指導内容を設定することが大切であると考え。また、本研究では、自立活動の時間と日常の学校生活全体、各教科に関連させて総合的に指導を行っていくこととする。

緘黙については以下【資料1】のとおりである。

選択性緘黙は「他の状況では話しているにもかかわらず、話すことが期待されるような特定の社会状況（例えば、学校、遊び友達と）では、一貫して話すことができない」などと定義されている。また、場面緘黙と呼ばれることもある。全ての生活場面で発話がない場合は全緘黙と呼ばれる。その背景には、不安を感じやすい特性があるとされ、発話だけでなく動作や行動が抑制されることもある。²⁾

【資料1】緘黙について

3 対象生徒の実態から

対象生徒は、当時中学部1年の女子で、現在は本校高等部に在籍している。主な疾病は、マルファン症候群、脊柱側弯症、緘黙症と思われる症状を併せ有しており、Ⅱ課程（下学年代替コース）で学習を行っている。小学5年生までは通常の学級、小学6年生からは特別支援学級に在籍しており、中学生から本校の病弱教育部門に入学した。緘黙症は医師の診断は受けておらず、正式な診断名は付いていない。吃音の症状もある。田中ビネー知能検査Ⅴ（平成29年9月3日実施）の結果、CA12：2、MA7：4、IQ60で、知的発達に軽度の遅れがある。S-M社会生活能力発達検査（平成29年9月3日実施）の結果は、CA12：2、SA7：9、SQ64で、社会生活能力にも軽度の遅れがある。

コミュニケーション等の実態については以下【資料2】のとおりである。

コミュニケーション	○入学当初、教師の問いかけに小声で返答することが一度あったが、それ以降は、教師、友達の前で発話はない。○授業中の教師の問いかけに、自分の考えをまとめる時間が必要になるが発声で返答する。また、教師から教科書を読むように指示された時は、躊躇することなく読むことができる。○友達の輪の中では、笑顔が見られる。○集団の場で自分から意思表示したり、自分から働きかけたりすることがほとんどない。○友達がいない場面や特定の教師、スクールカウンセラーとは会話をする。
その他	○学校で言葉が出ることに家族は驚いている。○初めての活動は見通しがもてないため、不安が強い。○自分に注目が集まると緊張で苦笑い、顔、身を固くして身動きできなくなる。○不安や緊張、嫌なことがあった時は、教師に伝えることができず、涙を流して訴える。○友達からの冗談の言動を受け止めることができず、涙を流し、その後、なかなか許すことができない。切り替えることができない。

【資料2】コミュニケーション等の実態

以上のことから、本生徒の不安や心配事を軽減させ、教師や級友等の他者とのやりとり場面を多く経験するようにすることで自信を付けさせ、社会的場面（学校、他者とのやりとり）で成功体験を積むようにしていくことで、主体的で積極的な意思表示ができるようになり、自立活動の時間と各教科に関連をもたせることで本生徒の学習上の困難も改善、克服できるのではないかと考えた。そのためには、スクールカウンセラーを含めた本生徒に関わる周囲の大人が本人の課題や指導・支援について共通理解した上で本生徒を支援するとともに、自立活動の時間や学校教育全体を通して指導・支援を行う必要があると考え、本主題を設定した。

4 研究の仮説

場面緘黙の傾向があり、意思表示や自己表現に課題のある生徒に対して、不安や心配事の軽減、いろいろな人との交流経験を広げる場面設定、絵・言葉カード等を活用すれば、教科学習でも自発的な意思表示を促すことができるであろう。

5 研究仮説実証のための手だて

仮説実証のために研究の構想図【図1】にあるように実態把握を丁寧に行い、その実態を基に目指す姿をイメージし、そのための3つの手だてを設定し研究を進めていくことにした。

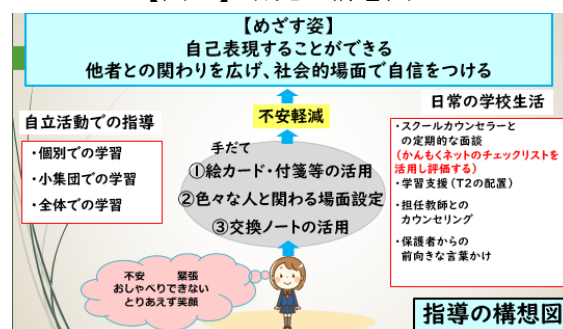
（1）手だて1「絵カード・付箋などの活用」

授業中は困って教えて欲しい時、「困りましたカード」、「トイレに行きたいカード」、「預かってもらっている携帯電話を返して欲しい時のカード」、「給食を残したいカード」【写真1】を提示することで、非言語的なやりとりを教師と行う。また、トイレに行きたい時「動作ポーズ」をすることで要求を伝える。本生徒の好きなキャラクターを使用することで、意欲を促す。また、ホワイトボードを活用し筆談等の非言語的なやりとりを大切にし、発話、発声を強制しないようにする。

（2）手だて2「いろいろな人とかかわる場面の設定」

ア スクールカウンセラーや級友との関わり

【図1】研究の構想図



【写真1】絵・言葉カード

第一学期のスクールカウンセラーと最初に15分面談した際、発声による自己表現が見られたため、2ヶ月に1回来校するスクールカウンセラーと関わる時間を特別支援教育コーディネーターに依頼し、毎回面談を設定する。教師とは交換ノートを通して、コミュニケーションをとるようにし、学校生活の中では、ホワイトボードを活用して筆談、選択肢から選択する、指差し、うなずきや首振り等の非言語的なコミュニケーションで関わるようにする。友達から本生徒に返答しなければいけないやりとりを求められた時には、以上に述べているコミュニケーション手段で表現することを教師が生徒に声かけをするようにする。または、教師が代弁し、本生徒が友達と関わるができるようにする。そして、級友とやりとりをするような交流経験を広げるための小グループでのグループ活動の設定をする。

イ 教師との共感的な関わり

担任や学級、各教科の教師と関わる。特に、教師との関わりにおいては、共感的な関わりを大切にするようにする。各学習の振り返り時や本生徒からの積極的なやりとりがあった場合は、本生徒に共感しながら、やりとりを行い、称賛することも意識する。友達から話しかけられ本生徒が身を固めて身動きできなくなっている時には「〇〇だね。」や「〇〇したんだよね。」と教師と一緒に言葉かけを行うことで本生徒が安心してうなずき、一緒に会話できる環境をつくる。友達から遊びに誘われ、身を固めて身動きできなくなっている時は「行っておいで」と背中を押すことで、友達の輪に入れるように促す。また、本生徒の気持ちを聞きながら、不安に思っている時は強制しないで、教師が付き添うようにする。

(3) 手だて3「交換ノートの活用」

ア 交換ノートの活用

コミュニケーションの一つとして交換ノートを活用する。不安な気持ち、楽しいこと等を交換ノートに表現するようにし、それを継続的に行うことで、教師から質問したり相談に乗ったりできるようにする。また、行事の感想をその場で考えることが苦手で時間がかかるので、できる限り交換ノートで事前に聞いておくことで、学級で、身を固くして身動きできなくなることなく感想文を書いたり、発表したりできるようにする。

イ 活動前の事前の丁寧な説明と声のかけ方の工夫

新しい活動が始まったり、学習発表会実行委員としての司会進行、学級の仕事をお知らせしたり、提案したりする時には、事前に伝えることで、本生徒の意見を聞くようにする。教師が話をする時は、目と目を合わせずに、何かを話すのを教師が「待っている」ように感じさせないようにすることを心がける。また、このような期待は不安を誘発させることにつながるため、「はい」「いいえ」で答えられるように選択肢を与え、本人が話しやすい声のかけ方にする。また、声が出た時は反応せず、会話を続けることを優先する。

5 自立活動と各教科との関連

本校では令和元年度より「児童生徒の主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり～アクティブラーニングの視点を取り入れた指導、支援の工夫～」についての研究に取り組んでいる。

本生徒自身、教科学習において学習への困り感や躓きを感じており、その課題を自立活動の指導と各教科が関連をもち教科学習においても自発的にコミュニケーションが図れるようにホワイトボードや絵カード、心情円盤などのツールを使用し、学部全体で支援ができるように授業中のT2配置や支援法の共通理解、情報共有、生徒の変容を記録するチェックリストの活用、定期的な教科部会を設定し、指導・支援の改善に取り組む。

6 指導の実際

(1) 日常の学校生活における取組

ア スクールカウンセラーとの関わり 手だて2

第一学期から15分間のスクールカウンセリングを継続して行った。1回目から、発声での意思表示が可能であり、学習面や日常生活での様子、家庭での様子等のことを話している。家庭、学校で支援していくことが必要であるということで、第二学期は保護者の方もカウンセリングに参加することができた。第二学期のカウンセリングから吃音についての課題について、本人、教師、保護者でそれぞれ共通理解を図った。本生徒が話す前には「せーの」と言い、タイミングを図ったり、一緒に言ったりすることを積み重ね、自信につながるようにした。

イ 級友との関わり 手だて2・1

友達の輪に入って会話する時は、ホワイトボードを活用して筆談、うなずき・首振りで気持ちを表現するようにした。また、本生徒の代わりに教師が代弁するなどして友達と関わるようにした。休み時間にオセロ、○×ゲーム、トランプ、折り紙、あやとり等を行い、遊びの中から自然に友達と関われるようにした。トランプゲームでは、勝負に勝ち、手を挙げて喜ぶ姿や負けて悔しがる姿が見られた【写真2】。



【写真2】友達とトランプをする様子

自然な笑顔で友達と非言語的なやりとりを行って

いた。着替えや教室移動時に「〇〇さんで行っておいで。」と促すと、うなずいて教師の付き添いなしで行うことができた。その際も、本生徒の気持ちを聞きながら、不安に思っている時は強制せずに、教師が付き添うようにした。

ウ 教師との関わり 手だて1・2・3

交換ノートを活用したやりとりを継続して行った。交換ノートでは、新しい活動が始まる際、事前に不安等を聞くと、「〇〇が少し不安。」や「チャレンジしてみます。」「先生そばにいて下さい。」などの前向きなやりとりが見られるようになった。また、「二学期もそばにいてください。」「寒くなるので、温かくして風邪に気を付けます。」「スイーツ作りが楽しみ。」「夏休みはキャンプに行くと妹と〇〇をした。楽しかった。」など、本生徒からの様々な発信が見られた。また、共感的な関わりとして、各学習の振り返り時や本生徒からの意思表示には、本生徒に共感しながらやりとりを行い、時には称賛しながら、また、課題については、一緒に正解を導き出しながら解決するようにした。

エ 自立活動の時間での取組 手だて2・3

現在、本校病弱教育部門中学部では、時間割の中に自立活動の時間を週1時間設定し、「全体での自立活動」「5人ほどのグループでの自立活動」「個別での自立活動」で生徒の課題に応じた学習を行っている。自立活動の時間における指導は、対象生徒についての3年間の指導計画【表2】に沿って実践した。

	1年次	2年次	3年次
自立活動	実態把握 チャレンジタイム 『伝えたい』 さいころトーク かるたトーク	『伝える・聞き取る』 あそびつくす!まなびつくす! SST	『聞きたい、伝えたい、私から』 SST

【表2】3年間の指導計画

7 成果と課題

(1) 成果

ア 不安の軽減を行うことで、自発的な表現が増えた。

交換ノートを通して、様々な活動での事前の丁寧な説明を行い、不安や心配事を聞くことで、本人の自信につながっていた。「不安や心配事を事前に聞く」「活動前は事前に丁寧な説明をする」「本人の気持ちを聞く」等の支援は非常に有効であった。本生徒の不安的要素を軽減することができたことから、チャレンジすることや自発的な意思表示につながったと考える。不安を軽減することは、これからも継続的に行う必要な支援であると考ええる。

イ 絵カード・付箋の活用で、自主性が生まれた。

絵カード・付箋等のコミュニケーションツールの使用を重ねることで、安心感が生まれ、担任以外の教師や級友に対してもコミュニケーションを図ることができた。また、授業中においてもT2の見守りだけで、自ら教科担任とコミュニケーションを図ることができた。

ウ 人前に出て表現する場を増やすことで、自信がついた。

自己表現や成功体験を積み重ねたことで、自己肯定感が高まり、人前に出ることへの抵抗感はなくなった。また、3年間の成功体験から何事も「頑張ればできそう」と意欲的になった。場面設定の効果は大きく「やってみよう」と意識が変わり、挙手で発表する姿も見られてきた。

(2) 課題

ア 誰に対しても表現できるようになる。

3年間の指導・支援の結果からコミュニケーションツールを使ったり発声で他者とコミュニケーションを図ったりすることができるようになったが、本生徒の目指す姿にはまだ到達しておらず今後さらに他者とのかかわりを広げ、いろいろな人とコミュニケーションを図る必要がある。

イ 自立活動と各教科を関連させた支援を継続する。

自立活動のみならず、教科学習と関連をもたせ学校の教育活動全体で支援していく必要がある。教育活動全体で実践することで、本生徒のコミュニケーションスキルの向上が見込まれる。

ウ 間違った解釈をして発信することを減らす。

コミュニケーションの経験がまだ浅く、間違った解釈、発信をしないように、SSTや内容の理解を深める必要がある。

今回の研究を通して、有効であった手だてを昇華させ、今後の学習活動や指導に生かしていきたい。

《引用・参考文献》

- (1) 文部科学省「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」海文堂出版 平成30年 p. 63、101
- (2) 病気の子どものガイドブック ジアース教育新社 p. 221
- (3) 笹森洋樹「緘黙について」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「障害のある子どもの教育の広場」〈<http://www.nise.go.jp/cms/>〉
- (4) かんもくネット 〈<http://kanmoku.org/>〉